

木下杢太郎(太田正雄)の留学日記

一

大正十年五月から十三年九月までアメリカ・ヨーロッパに私費留学した木下杢太郎(太田正雄)の留学中の日記としては、以下のものが『木下杢太郎日記第二巻』(岩波書店・一九八〇、以下この活字本は『日記』と略記する)に収められている。

- 1、〔大正十年日記〕 その五月二十六日(以下、五・26のように略記することがある)の前に Voyage とある部分以降。なお角括弧は原本に無い表題を『日記』が補ったもの。以下も同じ。
- 2、〔欧米日記一 大正十年〕
- 3、〔欧米日記二 大正十一年〕
- 4、〔欧米日記三 大正十二年―大正十三年〕
- 5、〔欧米日記四 大正十三年〕

福田 秀 一

6、〔四月巴里〕

7、〔Espagne Madrid〕 この表題は、用紙を四つ折りにして入れた封筒の表に記されている。

8、七月巴里

そしてこれらは、『県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録 4 木下杢太郎文庫目録』(神奈川文学振興会編刊・一九八八)の「その他の資料/日記」(三七頁)に

- ① 大九・一二・一八―一〇・一二・二六 一冊
 - ② 大一一・五・二七―一二・二五 一束(七八枚)
 - ③ 大一一・一・六―一二・六 一束(七七枚)
 - ④ 大一二・一・五―一三・五・二九 一束(九五枚)
 - ⑤ 大二三・一・一―三・二八、七・二〇―八・七 ノート一冊
- とある(原文横書、算用数字)のに該当する。すなわち、①は1の後半、②は2、③は3、④は4、そして⑤は5と8と(この二つは同

じノートに一続きに記されている)に、それぞれほとんど相当する(次の表を見れば首尾に僅かな相違を有する年のあるのに気づくが、今は無視する)。なお 6・7 は『日記』の「後記」では 5 に付説されているが、現在所在不明で出納されないと、「木下空太郎(太田正雄)「欧米日記」の成立」(本紀要前号、以下「前稿」と呼ぶ)の第三節に述べた。ところが 7 は、その後訪館して閲覧した際に他の年代のノートに紛れていたのを発見し、今では「後記」に言う通り⑤に挟み込まれている。そして、1 と 5・7・8 (それに未見の 6⁽¹⁾)の計五篇は当時の日々の記であるが、2・3・4 は中に当時の記を含むものの、全体として後年(昭和十年代の後半)の編集になることも、前稿で精しく考証したところである。その折、その編集が行われたのは「昭和十年代の中葉か」としたが、「二の台紙に映画「小島の春」の批評の下書の一部が使われている事実から、同十五年の夏頃と絞ってもよいかも知れない。日記を「M.OTA」の私製二百字詰原稿用紙に、原則として一枚に一日を書いて綴じずにおく方式は、『日記』第三巻に収める昭和八年から始まっているようである。

前稿に述べたように、2・3・4 には、A その日の記、B その日にレストランのメニューや劇場のプログラムなどに書き付けたもの、C その日の書信、D 後年の記と、それぞれ認められるものが混在している。そして B はほとんど A と同等に見なしてよいが、C はそれらと全く同じとは言えない(同じなら日記として手許に残す筈である)し、特に

D の読解には注意を要する。

そうした点を考えるために、先ず A・D に分類した日付の一覧表を掲げる。1 及び 5・8 はすべて A であるからその点では表示するまでもないが、1 は 2 と期間が重なりながら日付が入り込んでいる、その状況を見るのも有益であろうし、5 以下は記す月日も多くないのでその実情を示すことも必要と考えて、それらも表に含めた。

この表の 2・3・4 の部分では、『日記』が有する記事の日付を一々全部挙げ、中間を「」と略すことはしなかった。そして中点(・)は月日の区切りを示す他に、一枚の用紙に書かれまたは台紙に貼られた複数の日の境を示すのに用い、用紙・台紙(多くは同じ用箋)が改められていることは読点で示した。A 欄に一字下げていくつか記した地名や国名は、『日記』に立てられている区切り(およびそれに準じて立てたもの)である。

二

この表に区切りとして記された地名や国名を見れば、空太郎の米欧留学の行程や滞在地は大凡見当がつくが、その要点を見るために、『全集』(一九八〇年代の新版)第二十五巻付載の「年譜」(長男河合正一氏編)から差当たり不要な記事を省き、月ごとに改行するなど若干の体裁変更を加えて示せば、次のごとくである。

大正十年(一九二一) 三六歳(注、誕生日〓八月一日における満年

齢)

A (当日の記)	B (メニューなど)	C (書信)	D (後年の記)
<p>1 「大正十年日記」 一・4～四・28 (今、省略) Voyage 五・26～31 六・1～6、9、14、16、19、30 七・5、6、10、13、19 九・13～16 Paris 十一・9～30 十二・1～26</p> <p>2 「欧米日記 一 大正十年」 アメリカ 五・27 六・7 (書簡体)</p> <p>大西洋／英国</p> <p>仏蘭西 十・27・28、29 (その一)、30 (その一)・31 (〃)</p>	<p>七・21、23、24 (その一)、(その二) 実はその二、25・26・28 八・10 (その一)、17 九・29 十・26 (その二)、29 (その二)、「日付不明」 十一・11?</p>	<p>六・15 十・10</p>	<p>六・9・10・13、11、12、14、16・17、19・20・21・22、23・25・26、28 七・4、5、6、7、12、14、15、16・20、29 八・1、3、10 (その二)、14・15 九・2、13、22、27 十・18、25 十・26 (その一)、30 (その二)、31 (〃) 十一・1 (その一)、(その二)・2、3・4 (その一)、(その二)・8、10、Date (?)、27 十二・11、15、19、20、22、25</p>

A (当日の記)	B (メニューなど)	C (書信)	D (後年の記)
<p>3 「欧米日記 二 大正十一年」</p> <p>六・16 七・「17・18(その二)・19・20・21」(この部分、現在不見) 八・1(スケッチ) 九・13(その二) 「伯林」 14(記事)、15、16、17(記事)、18(その一)、20、22(その二) 十・6、7、8、9、10 パリ・リヨン(注、原文にないが、今補う) 「22」、25 十一・5、6、11、12、13(異国)</p> <p>4 「欧米日記 三 大正十二年―大正十三年」</p> <p>イタリア</p> <p>フランス・ドイツ・オーストリア(注、原文にないが、今補う)</p>	<p>一・16</p>	<p>一・26(その二) 四・8</p>	<p>一・6、19、20・21・22、23・24・25、26(その二)・27、28・29・30、31 二・25、26 三・1、9、24 四・22、24、27・29 五・16、17・18、19、22、24、28、29・30・31 六・1、2、11、26・27・29 七・16・18 八・1(日付のみ)、11、30 九・13(その二)・ 14(日付と地名、16末行と絵)、17(手帖)、18(その二)・19、21・22(その一)、24・23 十・13 十一・7 十二・4、6</p> <p>一・5(その二)、(その二)・9・10・11 二・3、10、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28 三・1、2、29(その二)、30、31 四・1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11</p> <p>七・16・18・23</p>
	<p>七・2、同、4、9、27</p>	<p>七・廿X</p>	

	A (当日の記)	B (メニューなど)	C (書信)	D (後年の記)
	八・21 十一・30 パリ(注、同前) 二・21―19 三・20(19を書いた用箋に貼る) 五・8(その一)、9 七・8	十二・27	八・31 一・18	八・3、6 十二・24、28・29 一・1・3、4・5、14、29 二・1・4、14・15・16、二月 三・19 五・8(その二)、22(その一)・(その二)、25、27、28、29
	5 「欧米日記 四 大正十三年」 一・6ゝ31 二・1ゝ27 三・1ゝ28・「月日不明」			
	6 「四月巴里」(注、この題名は活字本「後記」による。前稿七頁下段参照) 四・9ゝ13			
	7 「Espagne Madrid」(注、同前) 五・31ゝ六・3			
	8 七月巴里 七・20、27、八・4、7			

五月末(注、二十七日) 諏訪丸にて横浜発、欧米留学に向う。

六月九日 シアトル着⁽²⁾、以後

七月のクウバ(注、キューバ)行も含めて九月中旬まで在アメリカ。

ロンドンに約一ヶ月逗留した後

十月末 パリ着、サン・ルイ病院とソルボンヌ大学で研究を始める。

パリでは、ベルリッツに通うほか、ノエル・ヌエツト(注、前稿注 23 参照)に語学のレッスンを受けている。また児島喜久雄と美術を見て歩くなど親密な交際をする。

大正十一年(一九三二) 三七歳

七月 リヨンの植物学研究室で、ランゲロン教授と共同の真菌分類研究を始める。

この年 六月にストラスブール、八月、ブルターニュ、九月

―十月にはベルリンに旅行、ベルリンでグラザー、ルンプ等旧知と再会している。

大正十二年(一九三三) 三八歳

一月 リヨンを引揚ぐ。

原善一郎夫妻に同道して、エジプト・イタリアを旅行、他に阿部次郎、児島喜久雄、前田青邨等が同行した(四月まで)。

八月 ストラスブールの学会出席(注、日記によれば「癌、皮膚及癩の学会を傍観」)後、ハイデルベルグ、ウィーン、

ベルリン等を巡る。途中ミュンヘンで関東大震災のことを知る。

十月 ランゲロンとの真菌分類法成立、世界的業績となる。

大正十三年(一九二四) 三九歳

ベルリッツでスペイン語の講習を受け、

五月 パリを発ち、スペイン、ポルトガルへ、マドリイ、⁽⁵⁾

トレド、リスボア、コインブラ等を回り、南蛮、キシタン文献を渉獵。

八月 マルセイユを発ち

九月一日(注、実際は三十日、前稿注 2 参照) 神戸着。

三

これまでたびたび述べてきた通り、空太郎の留学日記としては、さきの表の A・B 欄の日々の記事、少し譲っても C 欄のものまでに止めるべきで、後日の筆になる(そこには記憶以外の確かな資料、例えば妻宛書簡なども時にあったようであるが) D 欄の日々は、参考程度に扱うべきものと考えられる。以下その線で『日記』の記述から、留学中の彼の体験や観察・感想をいくつか拾ってみたい。

第一に、医学者としての専門に関する話題がある。ただそうした記事

は、あまり日記に書こうとしなかったらしく、意外に少ない。今見る『日記』の形では、大正十一年の「欧米日記二」(以下、「二」のように略記する)に「四月八日」として入れた同日付「川寄」(注、⁷)には「河崎」とあるが非「学兄」宛の書簡がその一つ、もう一つは注4にもふれたが「三」の大正十二年に「七月廿X日 1923」とした「恐らく土肥慶蔵宛」書簡で、共に本来日記として記されたものではなく、専門家相手の書簡を後日回収して「欧米日記」編集の際に該当箇所に挿入したものと考えられる。特に後者は、ストラスブルで開かれた「癌、皮膚及癩の学会を傍観」した報告で、全く専門的な話題である。

一方前者は、ほとんど専門的な話題で終始しながら、どちらかと言えば研究上の連絡と言うよりは近況報告に近い。その中に、カビとその培養基のことなどについて情報交換をした後、「旧き雑誌や、パンフレーやテーズ(注、それぞれパンフレットやthesis〈論文、特に学位論文〉)に当るフランス語は得ることが出来ませんから、タイプライターで写して居ます。けちな留学生には中々骨が折れ升」といった愚痴に続き、

ミユコール、アスペルギールス、ペニシリウム(注、それぞれカビの名。最初のはケカビ、二番目はコウジカビ属、最後者はペニシリンの原料として著名なアオカビ類)、凡て名のあるものは三百種も集めました。目下全くカビ屋になつてしまひました。

で、自分の仕事といふものは出来ません。仕事には東京の方が遥に便利です。

印度かメキシコに行かなければ、自分オリジナルの仕事は一寸出

来相ありません。

当地に來り大に考が地道となり、碌々ミユゼーにも行かず、唯々ピルツ(注、キノコや真菌へ細菌やそれより下等のものを除いた、キノコからカビに至る菌類の総称)の意のドイツ語とピルツの文献を集めることに没頭してゐます。それでも時々うつ散(注、鬱散)にネットケル病院の手術を見にゆきます。ユロログ(注、泌尿器科医の意のドイツ語)になるつもりもないが、やはり一寸面白く感じ升という部分があり、当面の研究のテーマ・目的や環境・便益に関して、やや不便・不満を抱いていたように読み取れる(しかし、この時の研究がやがて真菌分類法の発見という実を結んだのであろう)。

これらは本来書簡に洩らされた感想で、初めから日記に記された感想で専門に互る話題を記したものは、「二」(大正十年)の「七月廿八日」と「10 August 1921」、それに「三」の大正十二年「七月四日」、「四」(大正三)の「式月九日」の条など、僅かなものである。第一は、その朝見た夢のことに始まり、夕暮の海辺でパナマの人と話し合つて「パナマがまた私の新しいデモン(注、「魅力」程度の意か)となつた。そこには、池の中の金魚や鯉のやうに珍しいいろいろの皮膚病がある。(後略)」という考えを述べた後、

「命は短い。私はまた玖波や中米へ来るやうなことはあるまい。行けばよかつた。行かうか」といふ思想と「命は短い。たつた一人で世界の隅々を歩けるものではない。馬鹿々々しい。もつと本質的な處で学ばう」という思想とが私の頭の中で争つた。

と書いている。差当りのフィールドとしてどちらを採ろうかとの迷いであろう(実際にはパナマには行かなかった)。

第二(10 August)は泊まっていた Hotel Normandie の用箋の表裏に記したもので、

今日は午前十時(正九時)ごろに Penn. Univ. の Dr. Weidman の Laboratory に往つた。

と書き出して、人の出入りや昼食代を Dr. W. が払ってしまったこととその反省とを記した後、「窓から Phyl. Broad Street の高樓が空氣遠近法を以て連つてゐる」(この欄外に「アレキサンドリヤの盛期を想像す。とに角一様式の文明」という、よく解らないが彼(理科系でいて古代の美術・建築にも関心を持つ)らしい観察と表現があり、更に

今日もまた "Pints" の Monographie が目に映つた。予はことに lation からの獲物と Fr. rubrum に就いて研究する積りである。とか

Mic. furfur は倫敦で Dr. Castellain を訪ひ、そこで英文に写し、Mic. de nouvelle spec は Dr. Sabourand の處で書き上げよう。

とかいう研究計画(原語には解らないものもあるが、本稿としては支障ない)が、偶然新聞で讀んだ「日本の海軍大演習のこと」や宿の机の「赤き覆」と「物静かでやさしい」「女給仕」、また「これを書きつつある隣席」の「女を雑えた「Tramp」や「直ぐ後ろ」で「老人が読書する」ことなどの観察とともに記されている。

第三(大正二・七・四)はかなり長い記事であるが、さきに引用した

川寄宛の書簡と内容の重なる面もあり、最低必要な部分だけを抄出してみる。

今朝は女中が夏の時間の七時に珈琲を持って来たから、仕方がなくそのまま起きて、直して貰つた原稿を清書した。いくら書いても書いても終へない。もう三日も続く。

ああと時々嘆息する。何たら因果のことだ。語呂のよし悪しもよくは分らぬ外国文で、たとへ落莫な、科学上の事実だとしたところで、書かなければならぬとは。

(中略)それにしても折角こんなに骨を折るなら、何か一かどの仕事でも出来ると可いんだが、(中略)。

芝居へも行かず、古典も読まず——そしてくだらぬ仕事で忙殺される。これが我輩の巴里の生活だ。獺が食へ。獺が食へ。七月四日

(中略)

ビブリオテク・ナシヨナルへでも往つて、古い写本から十八世紀の巴里の俗謡でも捜し出すぐらゐまでにならなくては、巴里も蔗境に入らぬ。

自分の仏蘭西学は中年者の急仕込みで、中々そこまではゆかぬ。少し埒が開きかける頃はさよならの時である。

外国留学——あつたら隙(ひま)つぶし。(同日)

途中と最後と(それぞれの箇所までが一枚の台紙に貼られている)に日付を記すのは日記としては異例で、日記としてよりは一種の手記、メモ

として書いたものかと思われるが、こうした心境の告白を記した日記も世の中には多いことで、これを書いたときの李太郎の気持が、「日記を書いている」と思っていた他の日とやや違っていたとしても、これも彼の日記の一日と見てよいであろう⁽⁸⁾。

これで見ると、李太郎はこの時期に専門の研究、特にそれを外国語で論文にすることに、多少の懷疑を抱いていたようである。しかし考えてみれば外国暮らしにストレスが溜まりがちなことは漱石の例を思い出すまでもなく、また若い時期に折々自分の専門や適性に疑問を持つことも、後の朝永振一郎の場合が思い合わされる。まして李太郎のように他の分野への関心や趣味が深く、更に妻との間にいくらか不協和音が鳴っていたれば(もちろん決定的ではない。前稿注10参照)、一層である。

四

この日記で目立つのは、やはり画家的な眼と美術への関心である。「二」(大正十年)の七月二十四日(ハバナ滞在中)の記事は二つあるが、初めの「七月廿四日」とある方は、

午前は Dr. Jané を訪ねた。彼は仏蘭西に学んだといふ、黒い髪、黒い顔で黒いあご髭であつた。まるで土耳其人のやうであつた。

午後サンチャゴに往つた。ここは素的であつた。驟雨が来て、まつ黒になつた。そして椰子の白い幹が殊に目立つたのである。

とか、「電車内の Scenerie (注、英語 scenery を誤ってフランス語風に

綴つたもの。他の箇所にも見える)」と題したメモ数行の中の「驟雨前の雲行、海の如き空だ、地平線に Palme の白枝、その間に(注、蔓に下がった細長い実の絵)果実あり、／(中略)道は赤又は Limestone の白土。／紅花さく」のような、続く「Santiago de las Vegas の光景」と題するメモには「閑静なる田舎道、Framboyant (注、flamboyant へ火焰木、紅花をつける)の誤で、前行の「紅花」も(これか)の花盛。／村道、緑ヌリの窓と高階なる格子。Bar」といった観察の記録が見え、二つ目の「七月二十四日」とある方は、「動物の生活サンチャゴ」と題する一種の写生文 (THE NORMANDIE / PHILADELPHIA のメモ用紙の表裏に記している) である。更に『日記』で罫線を隔てて次に置いている、「Juillet 1921」と題して「驟雨の前の椰子(注、今ルビを省く)の森／支那胡粉なす幹の列」で始まる詩は、七・23と同じ Plaza Hotel Company の用箋に書かれているので、この日の作と見られる。

ヨーロッパに渡ってからは、前引の川寄宛書簡(大一一・四・8)に「碌々ミューゼーにも行かず」とあつたが、実際にはそうでもなく、旅先でも寸暇を割いて美術館を訪ねている。例えば「二」(大一一)のドイツ旅行では、先ずケルンで

美術館⁽¹⁾の近世画には一寸珍しいものがある。殊にワン・ゴッホの橋の画が白眉である。本物は評判より好い。若い男の肖像の方は大に落ちる。次にクウルベエの森林内のピクニック図。事によると初期の作かも知れぬが、画室図などは筆がさへて居ないが、更

に純粹のサンチマンがある。ピカツソオの群像(ソオレルの家族)は中々厳しい處がある。色もツウシユ注、タッチも佳い。近來の思はせぶりたつぶりの絵などよいよるいくらか好^いか分らぬ。ルノアール一枚。作好^よくない。ゴオガン二枚、大に落ちる。(九・13、この後、段落を改めてドイツの画家四人の名を挙げ、「然し巴里から来るとどうも賞讀するわけに行かぬ」と言う)といった、遠慮のない褒貶がある。

ベルリンで

(前略)朝、K、Y 両君来てくれて□(注、原本約五字分空白、美術館名を失念したものか)⁽¹²⁾に行く。独乙人では(注、四人の画家の名、今略す)、近くフランツ・マルク等。少しも感心しない。それに反して少数ながら仏国印象派にはすばらしいものがあつた。殊にマネの「温室」セザンヌ風景、静物、ルノアール、モネ。クリンガアの大理石石像を見る。名作。此方面に向つては独乙人は全く期待を離れた。(九・15)

と言うのもそうであるが、数日後の

Alles Museum⁽¹³⁾(注、ガイドブックに「旧博物館」と訳す)の版画の部の特別室でレンブラント自筆の素描百有余枚を見たことは今日の大収穫であつた。G氏が案内して見せてくれた。薄き和蘭紙へ乾色インキを以て主として基督伝説を画くものであるが第一物の形が極めて精細で二、コンポジションがいつもうまくついてゐる。第三に線が簡單正確で、味がある。必ず明暗の暗示を持つてゐる。

(九・18 その一。因みに、この前後の日本人の名にイニシアルにしたものが散見するのは、後日公表するつもりで書いていたのであろうか)には、美術作品への専門的な分析がある。

ベルリン滞在中にもう一つ、原善一郎夫妻宛書簡(注3に言及の文面ではあるが、

(前略)この間石井柏亭君が見えて、一緒に Prof. Le Coq を民族学博物館(注 Museum für Völkerkunde 戦前は市の中央部にあったが、現在は郊外のダーレムにある)にたづね 高昌^{ツルファン}将来の塑像、壁、絹画を見せて貰ひました。これは中々面白いものです。貴君は見ましたか。またその Dr. Trautz⁽¹⁴⁾ともちかづきになり、そのうち招かれてゐます。(この人日本学担当、少し日本語を話す。)今後は(この室常は閉してありますが)この中央亜細亞室にしばらく通はせて貰ひたく思つてゐます。Le Coq の Buddhistische Spätantik des Mittelasiens (= Buddhistic Late Classic of Middle Asia)の本文は薄いが、色写真はすばらしいものでした。(中略、ここに「ル・コツク。いいおぢいさんです」とある)少し支那、印度、中央亜細亞の本を集めませんか。(後略、以下ロンドン・ドイツ・フランスにその方面やエジプトに関する本があるようだとこの情報を提供して「小生自身では全部とは手が出ませんが、貴君に蒐集の御希望があらば児島君とも相談しだん／＼集

めませう。貴意如何」とある)

という感想があり、満洲時代から抱いていた中国仏教美術への関心(その一端である『大同石仏寺』はこの前年、留学中に刊行)やこの春のエジプト旅行も契機になったかと思われる中近東・エジプト辺への興味を示している。

五

留学最後の年(大正十三年)のスペイン・ポルトガル旅行の日記は、冒頭に7とした「Espagne Madrid」の短い数日分しか残っていないが、その中にブラド美術館を訪ねた日(六・三)のかなり詳しい感想がある。

「今日は又ビプリオテエクにゆく積りであつたが、その前にミユゼオ・デル・ブラドオをのぞくことにした」と書き出して、「最初の部屋」の或る画家の絵について「技巧ではなく、布局の、むしろ物語の興味がら」一言した後、

その次はもうすぐエラスケスである。まるで空腹時にスウプものまずに、すばらしいシヤトオブリアン(注、牛ヒレステーキ)にありついたやうな気持である。たとへが下品なら、思ひがけなく天国に昇つたやうだといはう。

これでこそマドリドにくる甲斐があつた思ひ、旅のうれひもわすれた。エラスケスは、巴里でも維納でも見てゐたが、かう傑作がそろつてゐると、面くらはざるを得ない。今迄欧羅巴でみた画工のうち、理屈ぬきにして一番気に入つたものだといへる。

と、ベラスケスに出会つた感激と讃嘆を惜しみなく述べる。

つづいて個々の作品についての感動と讃美を

フエリペ四世半身像はまるでマネである。而もマネより遙かにうまくて、そしてマネに特有のいやな闘気がない。

のような全体的な印象批評だけでなく、

聖アントニオ・アバト、聖パブロを訪ふ(注、画題である)。全体の碧調の灰、まつくろい鳥、すばらしい趣味である。そして紡績女(注、イランデラス)の大幅、こいつは写真などで、よく承知してゐたが、こんな派手な、そして落付いた、あかるい画だとは思つてゐなかつた。彩色画だけは写真ではてんであてにならぬ。殊に中央部の穹窿から内部の(奥の奥)のけしきの気持よさといふなら話にならぬ。

と、部分や色調に着目し、続いて

一寸筆つきの相似からレンブランドを思ひ出すが、両人の大匠の異るところはよく分つた。そして自分のことなら予自身の嗜好といふものも良く分つた。レンブランドを伯林でどつさり見た時には大に感心した。すばらしい画工だと思つた。今エラスケスを見ると感心するよりも、愛執をいだく。かれには北欧人の堅実味はなれぬ。これにはどつしりとしたうちにいき(注、「粹」である)がある。しやれがある。軽快な精神が飛やくする。

と、一見似ているレンブランドとの比較(注、イランデラス)や自身の嗜好の発見に及ぶ。

ベラスケスへの讃美はまだ続き、「エラスケスを見るとマネがその裡にあることは無論だが、クウルベエもまたはドラクロアまでも亦その遠

心点をこのうちに没する。彼等はこの□□〔注、原本約五字分空白〕大匠に比すれば「支店」である」という、前言と一部重なる史観もある。その感想は更に、スペインとフランスとについて、その流行がかつては今と逆にスペインから行ったのではないかとの「空想」を呼ぶ。

この美術館ではまた、ゴヤやグレコをも見て、前者に対しては、
ゴヤ！ 何と云つていゝか、……予にはまだ十分はつきりとつかめない。銃殺刑のゑは実にすばらしいものである。そして、裸のマヤと衣服をきたマヤ、両方ともいい。マネのオランピアなどよりは遙にあくぬけがしてゐる。うまくあり、たしかであり、趣味のいいうえに素人目にも美しい。(後略)

と言う。後者については美術館に関する記述の最後に短く、
グレコについていふのはまだ早いだらう。このグレコにも黒白は実に見事なのがあつた。その室にはつひにセザンヌと見違へたりしたかのやうな多もあつた。

と記すだけである(次の段落の冒頭に「美術館ではかなり勞れてきた」とある)が、総じて今と違つて美術書や画集も少なく、あつてもカラーの図版などほとんど無かつた時代に、実物に接した感動の大きかつたことは、容易に推測がつく。

このような審美眼を備えていた彼は、エジプト・イタリアの遺跡や美術に接してどのような感想を持ち、どのように批評したのであろうか。それらは後日に草したいいくつかの文章⁽¹⁷⁾にある程度知ることができるとは

言え、当時の記録として『日記』に見えるものは、残念ながらほとんどない。僅かに「三」の大正十二年「三月廿九日」と「三月三十日」との間に置かれ、さきの表で「三・29(その二)」とした(用紙からイタリアでの筆と考えられ、恐らくこの配列が適当であろう)二枚の記述の中にそれ以太利の旅は人、親戚なる富裕の旧家に招かれて久く開かざる文庫を覽よといはれたるが如し。塵埃と□〔注、原本二字判読不能、下の字はあるいは「具」か〕との間に古来の宝物雑然散在す。旁業のもの〔注、彼自身を指すのであろう〕と雖もやがてその趣を会得して、尚深く佳境に至らむとする意を起さざるはなからむ。
フイレンチエに週日をおくり今日午后シエナに入れり。一境一物、亦別様の面目を呈す。人生短し、芸術と民族となんぞそれ悠久なるや〔注、「なんと悠久なことよ」という感嘆であろう〕。

六

留学中の日記に見る限り、奎太郎は研究面では前述のような愚痴を洩らしており、また妻に対しては相当不満をぶつけた書簡をたびたび書いてるが、ホームシックになった形跡はない。恐らく右に見たように専門(医学)研究以外の見聞で充実した日々を送ることができ、外国生活を十分楽しんでいたものであろう。

ただ一度、次のような記事がある。

le 16 Janv. 1922 (Dimanche)

昨日もさうであつたが、今度の *maladie* (注、「病氣」の意のフランス語で、彼は数日前まで流感で寝込んでいた)以来私の神経の一部はまだ回復しないやうに見える。*Bruit de la réparation* (注、*noise of the recovery* の意だが、医学の術語か)それがない。夜ねむれなく、*apetit* 少く、食物も旨なく、からだは少々常に寒く、物を考へてもしつくり感ぜられず、本を読んでも同様である。試験前に感じたことのある、*Neurasthenie* (注、神経衰弱、正しくはフランス語なら *-thénie*、英語なら *-thénia*) のやうである。

異郷でなくとも旅先で病氣になれば心細いもので、悪寒や食欲不振から軽いノイローゼ気味になつても不思議はない。しかしこの月の十九日にはもう昼に外で食事をしてゐる(『日記』の「le 19 Janv.」と「一月廿日」との間に *RESTAURANT MARGUERITE DE JÉJUNER* (= lunch) du 19 Janvier 1922 のメニューがある)から、十日頃からの流感もこの直後には全快し、それとともにノイローゼも治まったと思われる。因みに、一九二四(大正一三)・一・二の日記(A、「三」「四」に洩れ、『日記』第五卷に「補遺」として収める)にも、「一日朝以来ひどい憂鬱症に悩まされる。これは単に神経からではなく、どこか病氣にかかりかけてゐらしく思はれる。少し熱もあるらしい」とある。

もう一つ、「二」の終り近くに、「異国」と題した次のような手記がある。末尾の日付から『日記』が「十一月十三日」と判定してその位置に入れている。

青年時代に私が憧憬した欧羅巴は、現に今私が見てゐるやうなも

のではなかつた。学校を出た時数年間の不得意(注、不本意の意であろう)な生活の間に、私が夜毎宿直の室で空想して、どうかして有りつくことが出来たら、そしてけちくさい日本から遠離することの出来ると思つた處は、もつと絢爛で、もつと高雅で、もつと生々とした處であつた。そこから私は生の泉を酌むことが出来るだらうと想像した。丁度往昔九州の使者たちが羅馬へ行つた時のやうなそんな處であるだらうと思つたのであつた。13 XI

現実のヨーロッパに幻滅を感じたやうな口ぶりで、これも確かに當時の実感ではあるが、日記の他の日々をみれば、留学中の感情の振幅のつに過ぎないと言ふべきであらう。

そのヨーロッパないしフランスへの批判としてやや注意されるのは、次のやうな感想である。一つは「三」(大正十二年)の「七月九日巴里」とする記事で、「今朝貴君の書状を持つて、品川さんといふ方が私を尋ねてくれました」という冒頭や文体(「です・ます」体)からは、一見宛名を失つた書簡のやうにも見える。特に書き出しの固有名詞などは気になるが、全体的な印象では他日の公表を念頭に置いた手記(幸太郎が崎藤村を好んでいたとは思えないが、例えば藤村の「仏蘭西だより」のやうな)と見るのがよいかと思うので、さきの表でも A 欄に入れておいた。相当長文であるが、最初の段落(右の引用「尋ねてくれました」の続きは、次の通りである。

わかい人に取つては、滞在後四五日の巴里は全くすばらしい處ら

しく見えます。実の處を云ふと私は歐羅巴に倦きました。殊に巴里に。私は始め、滑な岩に取り付くやうな努力で、一生懸命に此の生活―自然科学の世界が主なものでしたが―に入り込んで見ようとして見ましたが、一寸手筈があつたかと思ふと、波が来て手を滑らします。私はもう其努力に倦きたし、向ふに取つては私は全く必要のない一外物ですから、もうやがて来なかつた前のやうに離れてしまふでせう。

すなわち前引のヨーロッパへの幻滅と通ずる感想であるが、続く次の觀察は今も一般のフランス人、むしろ欧米人一般に当てはまるように思われる。

仏蘭西の文明は殆ど全く自給自足の文明です。その点は実に驚嘆に値するところです。それ故又外国の文明に対しては無頓着です。南米や西班牙等羅甸民族の文明的宗主国として、希臘、羅甸その他には自国語しか□(注、原本破損)はない、(就点原本)ここの大家は、それらの追隨国に対して族長的の寛容と威厳とを示し続けて居ます。外国の文明は彼等に取つてはキユウリオジテエ(注、curiosityに当るフランス語)です。

此間この地で大騒をした日本美術の展覧会なども、グウルメエたる彼等にとつてはほんの一寸したキユウリオジテエでした。

そしてこの觀察の証拠として、

二三日前の晩、一人の医者で、古本と版画道楽の人の家に行きました。伊太利の古書、波斯の小画の外に日本の絵本を沢山持つて

おました。仏蘭西人は早く錦絵の線、色彩の美を発見しましたが、恐らくまだ南画の意味を感じることは出来ないだらうと思ひます。と言う。この点は、あるいは近年は(例えば去年他界したベルナール・フランクのような人を思えば)いくらか事情が變つてゐるかも知れず、続く次の段落も日本文学を理解しようとするフランス人(あるいは外国人)のすべてに該当するわけではあるまい。しかしわれれとして心しなければならぬことではある。

嘗つてソルボンヌで日本歌学史を講ずる(注、後述のルヴォンがであらう)のを傍聴したことがあります。万葉古今の名匠もこの国の言葉に直されて見ると、全くのただ事で、理由を説明しない「悲み」トリステスが風、雨、草、鳥の名に結び付けられてあるに過ぎませんでした。そして更に、

私は割合に早くから西洋の文学に親しんだが、然し今其本源の地に来てみれば已に其余りに東洋的であることを感じます。

と言ひ、「日本に於て嘗て知られなかつた方面――もつと強く人間本然の欲求、その運命を認識した基礎の上に、自分の文明的仕事を建設したい」が、それはかなり空しい努力であり、東洋的世界に浸りたいという「幻想」がバりに居ても自分を「誘惑」するが、「一旦この地の文明を見た上では、おいそれと」それに屈するわけにも行かない。「そして希臘的、基督教的建設的精神にならうとすると、くらくらとおちけが付いてくるという、懊惱と彷徨の告白が吐露されている。確かに彼は、東大医学部の学生時代から新詩社の同人やパンの会のメンバーと交わり、

偶然の動機からではあったが鴎外⁽¹⁹⁾の知遇をも得て、西洋の文学・文明に対しては、当時の若者の平均を遥かに上回る知識と理解を有し、また右のような苦勞を一倍敏感に感ずる方であつたには違いないが、こうした悩みと迷いは、明治から大正にかけて少しでも欧米の現実を知った人には共通のものであつたと思われ、その典型を見ている点でも李太郎の日記は興味深い。

七

右に言及していたソルボンヌ聴講のことは、「二」(大正十一年)の「二月廿六日」に見える。この日の記事は書簡(前の分類のC)で、宛名の部分は『日記』では省かれているが、あるいは与謝野寛宛かも知れない。⁽²⁰⁾「度々御手紙を頂きながら、つひ御無沙汰しました」に始まって、短い近況報告の後、

○雑誌をお送りすることをつひ怠つてゐます。普通の好い文学雑誌は全く無装飾です！ 絵入の雑誌はつまらないもの許りです。唯数種の美術雑誌が多少御参考になるものと思ひ升。

○倫敦以来南蛮熱が又復活しました。殊に巴里はカトリクの御寺が多く、その方に刺戟され升フランス・サビエエ(フランス・コ・ザビエルのフランス語)の伝記を集めたいと思ひ升が、中々集りません。

という二つの段落があり、これもそれぞれに注意されるが、その次に○今日これから Sorbonne に Monsieur Revon⁽²¹⁾の日本文学史の講義

を聴きに往かうと思つてゐ升。この人は十年許前に東京大学に法律の講座を持つてゐた人ですが、当地では法律ではなく日本文明史を教へてゐ升。この間紹介せられその家を訪問しましたが、上品ないい人でした。

とある。そして「和歌、俳句及び能、狂言のことを話して」いたが、李太郎はその方面が不確かなので、必要なら「研究に必要な」日本の書物を「取り寄せる位のことはしようと約束」したので、氣づいたものがあつたら送つてほしく、また自分でも「そのうち能位は翻訳して覽たい」と思うと言ひ、「坪内さんの編輯した近松の本文(註解共、早稲田出版があつたら)大使館宛に送つてくれなどと書いてゐる。ルヴォンの名は有名であるが、直接面談・聴講した体験談は貴重と言へる。

日本人仲間との交際として『日記』に見えるものは多くない。「大正十年日記」に見えた穂積重威のことは、前稿に述べた。そこに述べた古宇田とも「二」の十・13にパリの宿で邂逅しており、その他では画家の正宗得三郎・和田英作、美術史家の児島喜久雄が目立ち、これも前稿に述べた田村春吉の名も「二」に出ること、後に例示するごとくである。正宗は、石井柏亭の『柏亭自伝』(子息潤氏編、中央公論美術出版・昭四六)に付された年譜(これも潤氏編)の「大正十二年42(注、数え年)」の条に「パリに滞在。春正宗得三郎とイタリアに遊び、ナポリ、ソレント、アスジジで画作」とある。李太郎はその年二月中旬から四月半ばまでナポリ・ソレント・ローマ・シエナ・フィレンツェ・ヴェネ

ツィア・シラノなどを旅していたが、そこで石井・正宗らに会った形跡は今のところない。因みに、「二」(大正十年)の「le 10 Nov. 1921」(前記の分類で D)に「Mr. Théodore Duret / 4 Rue Vignon / 石井, 児島ト尋ネル / Livre et album: illustré du Japon p. Th. Duret」(最後の行は Book and album: illustrated of Japan by Th. Duret の意)とある中の「石井」は、当時柏亭はまだ日本に居た(右の年譜によれば十一年十二月にアメリカに渡り、年末に大西洋を越えて十二年一月にフランスに上陸)から、不明の別人である。

ただ正宗とはバリーで折々会っていたらしく、前稿第三節にも引用した「三」の元日(D)とその資料になった「四」(『日記』には省かれている)の同日とに、「日本人倶楽部」に同行して(ここをそのように読む)「粥を食」った他、その五日には

夜正宗の處に往く。(男女各一人の日本人名、今略す。来会者に違いない)うどんを手手にこしらへて食ふ。

という記事がある。

和田と児島については、「一」の「十月廿九日」(C)宛名はないが、恐らく妻正子宛)に、「廿六日朝十一時 London 発。/ 7 時過 Paris の gare du nord に着。それから、Hotel Campbel に投宿。(この次、「不日家を捜す」ことなど略)」(原文横書、句読点はピリオド・コンマの後、

此宿には和田英作氏が宿つてゐる。僕の室は水道あつて 32 Franc = 3yén. (和田氏のは 85 Franc) (中略、前夜大使館参事官の「芦田と

いふ人に和田さんと招れ」「日本料理」を振舞われたことも記す) 児島喜久雄君といふ、よく知つてゐる学習院の先生が直き近くの宿にある。

とある。それと前後して「26. Oct. 1921」(A)以下二日は西暦は省略して引用する)に「Mr. Wada」の一行、翌「27. Oct.」(A)には「Mr. Wada. / Mr. K. Kojima」の二行、「29. X.」にも「Mr. Amano. / Mr. Wada.」の二行があるが、それぞれその日に会ったの意であろう。⁽²⁷⁾

児島の名は「30. X. 1921 Dimanche (= Sunday)」(A)にも「Kojima — American Hou.」(Hou. は不明)とある他、続く「日付不明」の木村(莊八)宛の書簡(C)にも「巴里は非常にいい。児島喜久雄君とよく一緒に歩く」と見え、十一月三日(D)には「児島君十二時頃までゐる」(横書)とある。同十日にデュレーを「石井、児島ト尋」ねたことは、前述した。翌日の「11(注、この次に『日記』は? を打つが、原本ではそうとは断定できない、記号めいた形) Vendredi (= Friday)」(A)は「École, Cojima, Louvre. / Courbet の素描や / Manet の Olympia. / Delacroix / Mr. Hosumi. / Solidarité Sociale ノコトラ話ス」が全文であるが、つなぎの語を補って翻訳すれば、

先ずベルリッツの学校へ行った。次に児島とループルへ行き、クルベのデッサンやマネーのオランピア、ドラクロワの作品などを見た。次に穂積氏(前稿注 24 に記した重威)と社会の連帯について話した。

とあることであろう。この Cojima と綴っている。^(追記2)

そして注意すべきは、この年十一月二十七日付の妻宛の長文の書簡『全集』第二十三卷所収、番号一九三の一節である。すなわち、

当地はかなり知つた日本人があるがあまりつき合はない、つき合つてゐるのは

児島君 学習院教授

松井君

高杉君⁽²⁵⁾ 同専門海軍々医中佐

近藤君 紐育の正金(注、先年三菱銀行と合併した東京銀行の

前身「横浜正金銀行」の略)をやめて巴里で勉強して

ゐる男

だけだ。独乙⁽²⁶⁾仏フランスに留学する医者は下等なのが多いからつきあはぬ 医学の人が一番下等で独乙あたりでは教授が日本の留学生は昔から見ると品が落ちたと歎息してゐるさうだ。

とある。そして恐らくこの書簡を基にしたのであろう、「二」の「十一月

廿七日 の手紙に書く」と題した記(D)の末尾に、「児島 松井 高杉

近藤／今日のひる松井の處でライスカレエをたべる」とある。

この人達との交際は翌年(大一一)の「二」にも見え、例えば

午前高杉君を訪ねる。中食ホテル。午后田村君と外出。

夕、支那料理、児島君に会す。画工のカフェに(注、「カフェーで」

の意であろう)チヨコレエトのむ。(一・22)

とか

(前略)松井と一緒に夕食。

二時高杉君の所にゆく。田村在り。(中略、二箇所へ行き)又高杉の家に帰り、四時半ガアル・ド・リヨンに行く。三人カフェエにて七時まで話して別れる。(高杉マルセイユに立つなり。)

田村と支那料理屋にゆき、(中略)帰宅(十時)。(一・27)

のごとくで、ある時期は頻繁である。ただ、会ってどんなことを話したかがほとんど記されていないのは残念である。⁽²⁶⁾仙台で同僚になる小宮豊隆の名は、「二」の(1924)一・3の条に、「(前略) Hotel Cambel⁽²⁷⁾に」訪ねたと見える。

最後に紹介しておきたいのは、一つは言語論、特に日本語を論じた次の一節「二」の24・VI.1923・A)である。途中までしか残っていないが、どうして言葉を美しくすることが出来やうか。この場合出来るだらうとした方が可いかしら。或はどうして言葉を美しくすべきかと云はうか。それとも為たもんだらうかと云ふやうに言つた方が可いかしら。

文章語を成るべく現在の口語に近けることは必要であるが、日本の言葉は甚だ融通がきくやうで其実必しもさうでない。どつちかと云へば希臘語や独逸語などよりも羅甸語、仏蘭西語に近く、造語がむづかしく簡潔に物語ることが困難である。近來は、支那文明が衰へて、西洋文明が□(空白)から、実利に敏い黄色倭軀の此国民は、逸早くも牛を馬に乗り換へようと漢字制限や羅馬使用⁽²⁸⁾などを実際問題にして騒いで居るが、日本の文章がとに角或る美

しさを得来つたのには、支那の文字に負ふ所が甚だ多い。甚だ多
いと云ふ、その甚だは、口調のための「以下欠」

と論じている。杢太郎が戦後の国語国字政策を見たら、どう言うであろ
うか。

もう一つは、独仏の比較である。「二(大一二)の「九月十五日 伯
林」(A)に、

夜テヤテルハウス。外題タツソ。役者(三名の配役、今略す)、演出
法、きまじめで sec(「U」)発音コメデイフランセーズを聴いたあ
とではゴツ／＼してゐる。聴衆またきまじめで、せきはらひ一つ、
足音一つさせぬ。

とあるのは、両国の国語と国民性との直感的比較として面白いが、同じ
く「十月廿五日」(A)に

他の一事を知ることとは、他の一事に対して疑を起さすことになる。
独乙に行つた為め——ここでは、仏蘭西を知つたことの為めに悪
く見たが、今は却つて——仏蘭西に対しても始めほどの好意を感
ぜなくなつた。語学なども熱心に覚え込まうといふ態の甚だ減却
した^(マ)こと覚える。

とあるのは、どう解したらよいのであろうか。杢太郎はもとと中学か
らドイツ語を学んである程度ドイツ語・ドイツ文化にも親しみを持って
いたところへ、文学・美術への関心もあつてフランスとフランス語・フ
ランス文化にも近づき、専門の研究のためにフランス(パリ・リヨン)に
留学したのであつた。こうした好悪親疎の感情の揺れは、誰にもしばし

ば、特に若い時には、あることかも知れないが、彼はこうしたことにも
人一倍敏感だったのであろうか。

杢太郎の留学日記から読み取れることは、まだ他にも多い。特に前稿
にも少しふれたヌエットとの交際(主としてフランス語の個人教授や学
生時代(明治四十四年)に日本各地を案内した「ドイツの東洋美術研究家
クルト・グラザア夫妻」(前記「年譜」)との文通や再会、また創作の構
想メモと見られるものが何箇所も見られることなどにもふれたかった
が、すでに規定の紙数を超えたので、他日に譲る。

注

(1) 前稿の抜刷を「日記」の校訂者で「後記」の筆者でもある新田義之氏に
もお送りしたところ、6・7の各冒頭一葉のコピーを送つて下さつたが、
それで見ても6も当時の記であることは明らかである。

(2) 杢太郎が上陸したのがシアトルかヴァンクーヴァーかについて前稿注18
にも一言し、川口朗氏「杢太郎『欧米日記』ノート」(『甲南大学紀要文学
編』44、昭五七・三)に賛同する形で、「ヴァンクーヴァーに上陸し、それ
から汽車でシアトルへ向つたものと思われる」と述べたが、六月十日付妻
正子宛書簡(『全集』第二十三巻所収、書簡番号二六七)に「昨日五時頃シ
ヤトル入港、税関事務、九時頃マデカカリ」云々とある(因みに「大谷光瑞
氏ハ Victoria 下船」とある)のによれば、やはりシアトルに上陸が正しいか。
因みに、「欧米日記一〜三」が後日の編集になることに気づいておられな
かつた川口氏は、右論攷の注7以下で、それらの記事と書簡や随筆の記述
との間に見える時日の相違に疑問を呈しあるいは困惑しておられる点があ
る。

(3) 実業家。原富太郎の長男。拙稿「文文学者の留学日記大正篇——阿部次

郎(統篇)と小宮豊隆——(ICU『人文科学研究』第二八号、一九九七・三)の注16に簡単に紹介した。なお、この旅行より後の八月三十一日付で彼に宛てた書簡が「欧米日記三」に挿入されている。恐らく後日返して貰って入れたのであろう。「御葉書今朝拝見。巴里にてお目にか、れざりしは残念」で始まって、「クウルベエの喫茶図」のことから「児島君巴里にゆきてまだ帰り来らず。(中略)小宮君(注、豊隆)もスカンデナヴィにゆき」とか「この間一寸石井柏亭君が見えて」、あるいは「スペインの旅はうらやましく思ひます。小生も是非今春はゆき度思ひます」など、注意すべき内容もある。また「希臘のこと、児島君帰つてから相談の上御返事しませう」というのは、一行がエジプトの帰途に寄るつもりであったギリシアが「悪疫があつて行けぬことになつた」(この年一月三十日付妻宛阿部次郎書簡五〇一、拙稿「阿部次郎の留学日記」(ICU『アジア文化研究』別冊7、一九九七・三)第三節参照)ので、原が改めてギリシア観光を提案したのに対する返事ではあるまいか。この旅程変更については、李太郎も岳父河合浩蔵宛書簡(この年一・31、ルクソールにて、書簡番号二二三)に「実はカイロより希臘にゆく筈の處目下流行病猩癩との報を得予定を变しナイルの中流まで来たる次第候」とあり、イタリアへ戻つてからの妻宛書簡(二・21、ソレントにて)にもほぼ同内容(「雅典へ注、アテネ」に疫病が出たとの報知が来て」とある)を言う。

またこのエジプト・イタリア旅行は、『木下李太郎画集 第一巻 紀行集』の「解説」(新田義之氏)も引用する、この年一月十日と記して木村莊八宛書簡の形をとる「埃及旅行の後に」(『全集』第十二巻、初出は『中央美術』大一一・九の由。『全集』の「後記」は日付を二十日の誤りかと疑うが、第二十三巻の書簡集にも収録されず、むしろ創作的書簡ではあるまいか)に「若しH氏が僕を其旅行に促さなかつたら」云々とあり、原が誘つたそとして費用を負担したと、右にふれた妻宛書簡に見えている。なお医師であつた李太郎を誘つた主な意図は、身体の弱い夫妻の「健康の顧慮から」だとなるものであつて、メンバーはここに挙げられた人々の他に、阿部の「年譜草稿」(右拙稿参照)などによれば小林古径、右の阿部書簡によれば金子まさ子なる人(前述の岳父宛書簡によれば児島の親類で「ピアノ学習の爲に洋行」した人)も、同行している。

(4) 「欧米日記三」の「七月廿X日 1923」とある条。この日の記事は、さきの表にも示したように、もともと日記として記したのではなく、ある人への書簡の前半(やや大きなメモ用紙の両面と二枚目に一行と、『日記』に「以下欠」とあるように、内容的には中絶している)を、当時現地で記した「27. VII」と後日に記したと見られる「八月三日 1923 ハイデルベルヒ、ホテル、ウイクトリア」と頭書する一行の記事との間に挟んだものと考えられる。そしてその書簡の相手は、用語・文体・内容等から、恩師の土肥慶蔵(前稿注9参照)と思われる。

(5) 念のために言うが、以下に列挙された地名の「マドリイ」や「リスボア」は現地語の発音に近づけた表記で、誤記や誤植ではない。

(6) そうした話題は、恩師土肥慶蔵や友人田村春吉(前稿第五節終近く参照)宛の書簡(例えば『全集』第二十三巻の書簡一七三・一七九・一八七、二〇五・二三七等、土肥宛の前三者は『皮膚科及泌尿器科雑誌』に載せられた)で処理したようである。

(7) この人物は、以下に一部を引用する書簡の内容から、医学あるいは生物学専攻の後輩と思われるが、川寄あるいは川崎にしても河寄あるいは河崎にしても、鉄門倶楽部(前稿注11末尾参照)や学士会の名簿に該当者が見えず、目下不明である。

(8) 「四」(大二三)の「式月九日」(原文横書、句読点はピリオド・コンマ)のことは紙幅の都合でここに記すが、「今日八午前 Hôpital St. Louis ニユキ久振ニテ Dr. Sabouraud ニ会ヒタリ」で始まり、「Policlinique ハ前トハ異ル部屋デアツタ。(中略) Fungus の Classification に関する Tirage (注、à part の略、抜刷。前年十月にランゲロンと共同で考案した分類法と思われる)を贈呈した」とあつて、その前後にかつての同僚たちの消息を記して、「Labor. de paras. (注、Laboratoire de la parasitose、寄生虫症研究室か)に勝沼が訪ねて来た」などとある。

(9) この「勝沼」は、このころ外遊していたという文献を見出さないが、当時愛知医大教授の勝沼精蔵であろう。東大医学部で李太郎と同期、内科学専攻。名古屋帝大教授から戦後は名大校長も勤め、文化勲章も受章した。朝永振一郎の留学生活については、その「滞独日記」によつて考察したところを、「朝永振一郎の「滞独日記」(ICU『人文科学研究』第二九号、

一九九・三に述べる。

- (10) 空太郎が中学(独逸学協会中学校、今の獨協中学・高校)時代から美術が好きで画家を夢見た(長男正一氏の編んだ前記「年譜」明治三十一年すなわち中学入学の年の条に「文学より絵画を愛したと自ら記している」とある)が、高校(一高、その医学部進学コースの第三部)に入ってから右元禎教授(余談ながら漱石の「三四郎」の「偉大なる暗闇」のモデルとされる)の影響などもあって美術に代り文学への志向が強くなり、「文芸への希望を断ち難く、転科の意志もあつたが、岩元禎教授に説かれて思い止まる」(同「年譜」)こと、しかし美術や文学への愛着を終生捨てなかつたことは、既に周知に属すると思うが、例えば前稿の注2と注10とに挙げた、杉山二郎「木下空太郎—ユマニテの系譜」や野田宇太郎「木下空太郎の生涯と藝術」にも説かれている。

- (11) ヴァルラフ・リヒャルト美術館 (Wallraf-Richartz-Museum) で、以下の記述にある「ゴッホの橋の絵」は日本の教科書でもよく見る「アルルの橋」(一八八八)、「クウルベエの森林内のピクニック図」は「狩人の朝食」(一八五八)、「ルノアール一枚」は「アルフレード・シスレー夫妻」と、それぞれ猿渡紀代子氏に教えられた図録から判るが、その他の絵については図録に該当するものが見えない。

- (12) 以下の記述から、ナショナルギャラリー(今、英語式に発音しておく。なお、戦後「新ナショナルギャラリー」ができたので、今は「旧ナショナルギャラリー」と言う)と判る。同館のことは、有川治男他編『ベルリン美術館2 近代美術の展開』(角川書店・平五、この書も猿渡氏に教えられた)の「フランスの印象派」に詳しい。また「マネの温室」とあるのは、木の長椅子に腰掛ける女に椅子の背に手を掛けた男が斜め後ろから話しかけている「温室にて」(一八七九)である。右の書によれば、セザンヌの風景画としては「ポントワーズ付近のクルーヴル川の水車小屋」(一八八一頃、モネのは「サン・ジェルマン・ロコセルロワ聖堂」(一八六六)、マックス・クリンガーの大理石像としては「アンフィトリート」(一八八九)がある。

- (13) 『エアリアガイド/123ドイツ』(昭文社・一九九六)の「旧博物館 Altes Museum」の項に「(前略)二〇世紀のドイツ美術と、一五世紀から今日までの素描や版画を展示している」(原文横書、算用数字)とある。

なお「[1]」にはこの二日前の十六日に「午前児島君と Altes Museum に希臘彫刻を見る」とあり、続けて Neues Museum にも行っている。後者は右のガイドブックには見えないが、一九二〇年代のベデカ(ドイツ語版・英語版の『北ドイツ』やドイツ語版の『ベルリンとその周辺』)には出ている。建築が前者(一八二四—二八)より後れる(一八四三—五五)故の名であるらしい。

- (14) Friedrich Maximilian Trautz 一八七七一—一九五四。その経歴等は武内博編『来日西洋人名辞典』(内外アソシエーツ・一九九五増補改定普及版)に出ているが、初め陸軍士官。第一次大戦後日本研究を志し、「日本の仏舎利塔」の研究でベルリン大学から学位取得。ベルリン民族学博物館の助手(空太郎が日記に書いているのはこの時期)を経て東海道の研究で教授資格取得。一九三四—一九三八年日本滞在、後半四年は京都ドイツ文化研究所主任。一九三八年帰国して故郷カルスルーエで没。遺言により高野山に埋葬、奈良大安寺・鎌倉東慶寺にも墓がある(以上、右辞典を要約)。

- 現在ボン大学日本学科には、彼の集めた和古書・地誌・道中記が多いが併書・近世小説その他もある)・活字本計約三八〇点がトラウツ文庫 Sammlung Trautz として保存されており(拙著『海外の日本文学』の「国文学者の米欧回覧記」参照)、その書目は国文学研究資料館の『調査研究報告』第四号(昭五八・三)に載せたが、その後 Eva Kraft 女史(前ベルリン図書館東亜部長)の編んだ『明治以前日本写刊本解説目録 JAPANISCHE HANDSCHRIFTEN UND TRADITIONELLE DRUCKE AUS DER ZEIT VOR 1868』第三冊(一九八八)に、他のいくつかの文庫のものと共に収録されている。なお、その蔵書印は「虎打」という印文であったことが、渡辺守邦・島原泰雄共編『蔵書印提要』(日本書誌学大系 44、青雲堂書店・昭六〇)から判る。

- (15) 『えすばにあ・はるつがる記』(岩波書店・昭四)に収める諸章(帰国後の筆になる外篇を除く。なお『全集』第十二巻にも収める)は、現地での折々に書いたものと見られ、特に「マドリイ市」の中の「プラドオの美術館」でベラスケスについて述べた部分などは、本文に引く日記を少しだけ推敲したものとも言える。しかし全体として紀行ではあるが「日記」性が弱く、留学日記そのものとしてではなく参考資料として扱いたい。

(16) 因みに李太郎と同時期に留学していたその上エジプト・イタリアへ一緒に旅行した阿部次郎はレンブラントを高く買っている。尤も彼が多く引合に出したのはルーベンスで、後者にはレンブラントに見るような誠実と憂鬱がないと言っている。そのことは注3に挙げた拙稿にふれた。

(17) 例えば有名な「テエベス・百門の都」や注3にふれた「埃及旅行の後に」、「エネチア・長崎」その他。それらの中には「其国其俗記」（岩波書店・昭一四）に収めたものもあり、またそうでないものも『全集』第十一、十四巻あたりに収められている。

(18) この年一月十五日付妻正子宛書簡に「小生は咳は出なかつたが風邪（流感）で五日許臥床して昨日離床した所だ」とある。

(19) 李太郎むしろ太田正雄が鷗外に初めて直接会ったのは、よく知られていることと思うが、前記「年譜」明治四十一年（一九〇八）の条に

この年、正雄は薬物学の試験日を間違え、追試交渉を鷗外に依頼、鷗外は担当の高橋順太郎教授を訪ねたが、交渉は不首尾に終り、原級に留まった。この追試交渉の依頼のため、平野萬里に伴われて鷗外邸を訪れたのが、最初の観潮楼歌会出席となった（十月三日歌会）。

とあるようなことからであった。

(20) ここに引用する最初の〇の条に関しては、前年（大正十年、李太郎出発の年）八月二十八日付与謝野寛書簡（『木下李太郎宛知友書簡集上巻』二二一）の中に

若しオデオン（注、オデオン座のことであろう）の廊などにて御目に触れた新しい雑誌（代表的のものハ日本にも参つてゐますから）新しい詩集などを御送り願ひます。

という一節があり、同年六月十七日「聖路易（注、セント・ルイス）停車場」発信の与謝野寛宛書簡（『全集』第二十三巻一七二）、「大正十一年十一月『明星』より転載」とある）には

兎に角美術の方では大した事はありません。文学雑誌ではDIALなどがありますが、これも同様。

とある。また二番目の〇の条は、明治四十年夏李太郎医学部一年を終った休み）、「与謝野寛が引率する新詩社の九州旅行」（前記「年譜」に参加し、「この旅行によって、南蛮詩を書きはじめた」ことが思い合わされる。

(21) 名はミシェル Michel 一八六七—一九四七。注14に挙げた『来日西洋人名辞典』から来日以後の部分を引き（原文横書、算用数字）、

一八九三年一月東京帝国大学法科大学フランス法の教師として来日。法科大学で多くの優秀達の育成に当たったが、かたわら司法省法律顧問に就任、勅任取扱に遇せられた。法律学教授のほかに日本文化の研究に従事、のちパリ大学より文学博士号の学位を取得した。一八九九年任期満了となり帰国した。帰国に先立ち、多年の功績に対し日本政府は勲三等瑞宝賞を贈った。帰国後はパリ大学文科大学で日本文学や東洋史を講じ、一九二〇年一月には同大学正教授に就任した（注、李太郎らが会ったのはこの直後となる）。一九三七年三月パリ大学を退官し、パリ郊外（県名省略）シヨクワンにおいて悠々自適の生活を送っていたが、第二次世界大戦中ドイツ軍に退去を命ぜられた。戦後再びシヨクワンの自宅に帰ったが、一九四七年一月一日死去。多くの著作があるが、『日本文芸抄』（一九一〇）はヨーロッパへのわが国の文学紹介に多大の貢献を果たした。

とある。最後に挙げる書は戦前に多くの版を重ね、一九二五年にはドイツ語にも訳された *ANTHOLOGIE DE LA LITTÉRATURE JAPONAISE DES ORIGINES AU XX^e SIÈCLE* のこと。戦後のキーン教授の『日本文学選集 Anthology of Japanese Literature』に匹敵する。

(22) Théodore Duret 一八三八—一九二七。西洋美術史では著名な人物だが、念のために『岩波西洋人名辞典 増補版』（一九八一、原文横書を引けば、フランスの美術評論家。はじめ政治記者として活動し、（中略）のち（中略）アジアを旅行して、旅行記『Voyage en Asie, 1874』を著した。その著『印象派の画家達 Les peintres impressionistes, 1885』で当時攻撃されていた印象派を弁護し、また日本美術への理解を示した。とある。

(23) 例えば「」（大正十一年）の「le 19 Janv.」（原文横書）に 天野弘一君と午 Rest Marguery に食事 100f. M. Amano へ le prof. Revon を其 Appartement に訪ね。とあって名は知られ、『学士会会員氏名録』によって名の読みは「ひろかず」、明治三四年東大法学部仏法科卒、大正初期から戦中まで東京で弁護

士、戦後は(疎開で居ついてか)三鷹に隠棲して昭和三二―三三年の間に没と判る。

右の引用のすぐ後、一・26(D)に「午後(中略)ガアル・ド・リオン(注、パリの始発駅の一。リヨンからマルセイユ、ニース方面へ行く列車はこの駅から出る)にゆき、二十十分初(天野弘一氏を送る。松田公使、夫人と令嬢居る)とある。松田公使一家も見送りに来ていたのか、それとも天野と同じ列車に乗ったのか、不明から、この時帰国の途についたのであろう。

(24) 次に言及し注27にも一部を引く妻宛書簡(大一〇・一一・二七)の注27引用部分の次に、

和田英作さんと二週間許同じホテルに居たが、まるでお太鼓(注、太鼓持、幫間)のやうな人だつた。あれぢやろくな絵がかけよう筈がない。今つき合つてゐる人のうちで児島君といふのが一番正直ないい人だ。松井(注、本文の左に引用する部分に空太郎自身の説明がなく、不明)などは日本へ帰つてほらを吹くだらうが、何の為に西洋へ来たか分らないやうなものだ。然し大へんな入費で生活している。その為め仏フラン語もどうかうかしやべれるやうになつてゐた。という一節がある。好悪がはっきりしている空太郎の一面が見られるようである。

(25) 『全集』には「高松君」とあるが、今改めた。その理由の第一は、書簡の原本は見えないが『日記』原本には明らかに「高杉」とある(そのことはこの前行その他この付近に見える「松井」の「松」と比べても明白)ことである。これは十一・4(二度出る)でも同様で、この兩日の記事はDに属するが、親しく交わつた人物の名を誤記するとは考えにくい。更に「高杉」の名は、例えば「欧米日記二」(仏蘭西に「下宿は」Londonに行つてゐる高杉といふ人(海軍軍医監が帰つて来て捜してくれる筈)(十・29)などと既に見えている。

もう一つの理由は、これは高杉新一郎なる人物に違ひないと思われることである。すなわち『学士会会員氏名録』の載せる「高杉新一郎」は明治四〇年東大医学部卒(空太郎より四年先輩、なお先輩にも「君」をつけるのは当時普通であつた。また鉄門倶楽部の氏名録でもこのことは裏付けられる)、大正九―十二年には「海軍経理学校兼軍医学学校教官」、住所欄に「在

外」とある(十四年には帰国していたようで、また職業欄には「海軍軍医学学校教官」とのみある)。また、『東京帝国大学/医学部卒業生氏名録 従明治九年/至大正八年』によれば専攻科名は「皮膚」で、職業欄に「仏国駐在」とある。

(26) 「四」(大二三)の「式月九日」、注8に引いた部分の少し後に、「それから二人(注、この前後文脈がやや掴みにくい、勝沼と二人であろう)で日本人倶楽部に行つた。／そこで(三人の人名省略)などに会つた。青山と球をついた。／ついに十一時半になつた。／まだ下には人々居り、それから、Etoileの近くの何とかいふCafeにて遂に二時まで、雨の中を(中略)びしよ／と家に帰つたがすこしいやであつた。／Cafeではいろ／＼の昔語をした。ことに若い恋愛の *sentiment* のことなどが話題になつた」とあるが、この最後の部分のようなのは例外的である。

(27) これらに先立つて、右に一部を引いた大正十年十一月二十七日付の妻宛の長文の書簡の中に、

現在の仏フランス文明には感心出来ない。然しここでは希臘・羅馬正系の伝統を研究することが出来る。英吉利の文明は商人の文明で、ブリチシュ・ミューゼヤムに行つても、埃及、印度等から盗んで来たもの、外には英国産としては確なものはない。英国は医学はだめで、唯東洋学^{オリエンタル}の研究には便利である。英国の文明に比すれば国は弱い、仏蘭西^{フランス}のものの上である。

独乙から帰つた人にはよく独乙をこなすが、碌々独乙語もよめず、哲学の概念がないのだから独乙が分りやうはない。今独乙の状態は憫むべくなつてゐるが、勉強は出来ぬことはない。子供を育てるなら独乙かフランス語を第一にするがやはり必要だ。英語は唯当用を便すればそれで沢山だ。

という一節がある。

しかしそれより二箇月前、フランスからドイツに旅行して美術館を歩いたときには、第四節に引用した書簡と日記に見るように、フランスの方を高く評価している。

(付記) 一、今回も各方面のお世話になつた。特に神奈川県立近代文学館の方々

には、李太郎日記原本の再度の閲覧調査でお手数をわずらわし、注25の最後に記した東大医学部卒業生の古い名簿は、同大学医学部中央図書館の係の方をわずらわして医学史料室にあるのを見つけ、一見することができた。また、李太郎が見学した美術館やそこで見た美術品の同定については、注記11・12にも記したように猿渡紀代子氏に資料を見せられあるいは示唆を受けた点が多い。改めて記して感謝申し上げる。

二、前稿の注一に述べたことについて、若干補足しておく。戦争末期の父の当直とはどういうことか、そしてなぜ私がそのとき父の研究室に寝泊りしたのかと、何人かの人から訊かれたからである。これはあまりに個人的なことで本文の論旨にも関係がないため省筆したのだが、あの文面だけで事態を推測できる世代も少なくなり、昭和史の一齣として伝える必要があるかと思うに至ったからでもある。

東大では空襲が激しくなった昭和二十年春以降、各学部からだったか東大(本郷)全体からだったか、何人かの当直を出して警戒に当ることになり、父の場合はそれが約十日に一度位の割合で番が回ってきたように記憶する(文学部の久松潜一教授と組んだこともあると、後に回想を聞かされた)。そしてその頃私の家では、母が妹・弟を連れて、戦前に父が仕事(夏休みの講義原稿執筆)のために建てておいた信州の小屋に疎開中で、私は父と二人で暮っていたのであった。そのため、父の当直の夜は父の研究室(ベッドは部屋にあり、私は応接用のソファーに寝た)に泊ったのである。

なお、戦後家内の一家が仮寓したその母の実家とは、信綱夫妻が熱海に疎開・隠棲したあとの佐佐木家である。

(追記1) この「日本美術の展覧会」は、『近代日本総合年表』(今、第三版を用いる)の大正一年の条に「パリの国民美術協会(注、ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール)のサロンで、日本美術展(六・一五)」(原文横書算用数字)とある(『日本美術史年表』にも提出)とあるものかとも思う(IUCU大学院比較文化研究科後期課程在学中の平山美樹子さんの示唆による)が、一年以上前のことを「此間」と言うかどうかに、不審が残る。

(追記2) 児島は、李太郎の生前に書いた随想「太田正雄君と私」(『科学ペン』改題『科学思潮』第一号、昭一七・一、この文章のことも右の平山さんに

教えられた)や没後の「太田君の雑然たる思ひ出」(『文藝』第十一号、太田博士追悼号、昭二〇・一二)に、このころのこともいろいろ回想している。また『藝林間歩』(『文藝』と同じく野田宇太郎氏が編集・刊行していた文芸誌)第一号には、石井柏亭の「木下李太郎追憶」、小宮豊隆の「太田の思ひ出」、阿部次郎の「追哭」、颯田琴次の「太田正雄君の声」などの追悼文に交じって、李太郎の肖像を含む児島のいくつかのスケッチが、「太田君と巴里にあつた頃」と一括してカットに挿入されている。